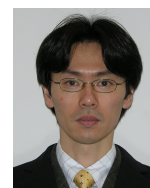


# 全世界のコンテナ船動静と コンテナ貨物流動の概略を捉える



港湾研究部 港湾システム研究室 主任研究官 赤倉 康寛

## 1. はじめに

我が国港湾の競争力強化のためには、世界の海運・港湾の情勢変化を的確に把握し、施策等の企画立案に活かすことが非常に重要である。そのため、全世界のコンテナ船の動静やコンテナ貨物流動の分析を、継続的に行っている。

## 2. フルコンテナ船の動静

LMIU (Lloyd's Marine Intelligence Unit) による寄港実績データとLRF (Lloyd's Register - Fairplay) の船舶諸元データをリンク付けしたデータベースを構築し、港湾別・航路別の寄港状況等を分析した。図-1は、水深15m以深の大水深バースを必要とする大型フルコンテナ船の寄港回数である。2004年には、中国本土がアメリカを抜いてトップに立っていた。一方、日本は、2006年は香港に次ぐ世界4位であった。近年の推移を見ると、中国本土の伸び率が群を抜いていることが判った。

## 3. 外貿コンテナ貨物の総流動量

コンテナ船の動静は、外貿実入コンテナの総流

動（総流動量とは、仕出港から仕向港への全てのODを集計した流動量）と対応している。そこで、これらの関係をモデル化し、主要国の公式統計等による港湾コンテナ取扱量を用いて、世界の地域間・国間の外貿実入コンテナ総流動量を推計した。図-2は、最新の2004年実績に基づく地域間総流動量の推計結果である。東アジア域内流動量が一番多く3千万TEUを超え、北米・欧州-東アジアの基幹航路は、約1千8百万TEUとなった。東アジア発着コンテナ量は8千4百万TEUと、全世界総流動量の約7割に及んでいた。

## 4. おわりに

今後もこれらのデータを継続的に蓄積していくと共に、より最新のデータを用いた分析を継続していきたいと考えている。

### 【参考文献】

赤倉康寛・二田義規・渡部富博:世界のコンテナ船動静及びコンテナ貨物流動分析(2007)、国総研資料 No.432. <http://www.nilim.go.jp/engineer/index.html>

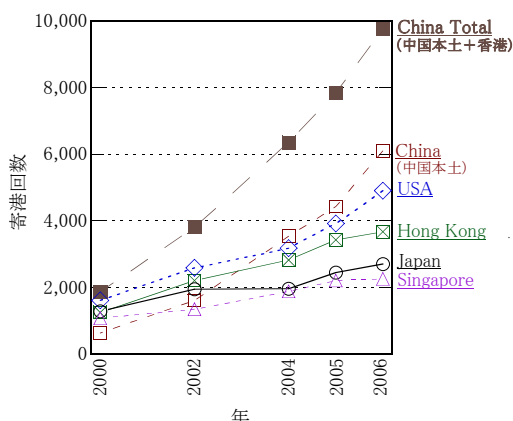


図-1 大型コンテナ船の寄港回数

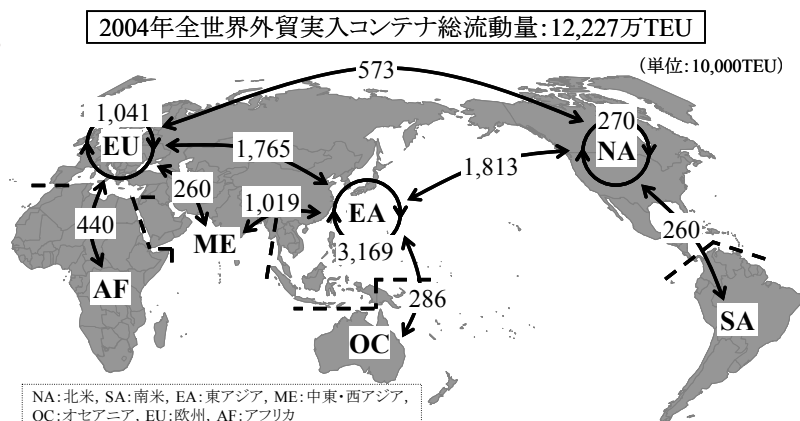


図-2 国際海上コンテナ貨物の主要地域間総流動量